からだとは・病とは(58)　不幸な、でも幸いな１週間　　鈴木斉観（斉観堂）

8月26日日曜に次男は3歳となり、誕生パーティーをした。次男にも家族にも幸福な誕生日だったが、翌日の朝食後、「次男が熱い」と連れ合いが言う。診ると、どこを触っても熱い。もちろん元気な子供だから、普段から熱いわけだが、更に高熱である。背の最上部付近が特に熱が発散しているので、葛根湯を4時間置きぐらいで飲ませ、眠った時に鍼をした。鍼は刺したり触ったりしない空中鍼である。夕食の時に、食べると口の中が痛いことが分かった。夜になって、熱感がなくなり、風呂は自分から入りに来た。風呂の中では機嫌良く遊んだ。

夜9時、機嫌良く寝入ったので、もうだいじょうぶかと思ったが、しばらくして再び熱感が出てきた。今度は背の最上部付近ではなく、肩甲骨の下辺りで熱感が強い。そこで今度は小柴胡湯加桔梗を飲ませた。更に夜中になって、バタバタと苦しんでいる。左頬の熱の発散が強く、口内炎の腫れが強くなっている様子であったので、小柴胡湯加桔梗石膏を飲ませた。それからも何度か起きたと、連れ合いは言う。

翌朝は落ち着き、腫れによる痛みも感じていない様子で目覚めた。熱感もなく、安心したが、朝食時、お腹が空いているので食べようとするのだが、食べると痛み、「どうして？」と言っている。食事以外はほぼ通常に戻った。1日3・4回のペースで小柴胡湯加桔梗を2日続け、4日目木曜の朝食は普通にとれる様になった。

それで、ほっとしたと思ったら、その木曜、今度は中2の娘が始業式から帰り、しばらくすると、熱っぽいと言う。夜には39度4分にまで上がった。最初、2時間置きに葛根湯を飲ませた。最初は発汗しなかったが、3度目の服薬後、発汗するようになり、熱は下がり始めた。途中から小柴胡湯を併用し、朝には37度となったが、頭痛がすると言う。学校は休ませ、今度は桂枝湯と小柴胡湯を1日3・4回のペースで併用した。昼には元気に食事もできた。

やれやれと思いながら、昼休みは買い物に出たが、帰ってくると、小4の長男が帰宅している。帰るには早い時刻である。熱があって、「迎えに来てくれ」と学校から連絡があったと、連れ合いが言う。夜には39度7分まで上がった。娘と同じ様に服薬させ、翌日土曜には37度4分になって、とりあえず安心した。

娘は下唇の内側に口内炎があったが、定演を1週間後に控えた合唱団の1日練習に元気に出掛けていった。長男はまだ熱がある。耳の奥が痛み、特に食事すると痛い様である。小柴胡湯と葛根湯の併用に桔梗を加えた。

翌日日曜には食事の時に痛みはあるようだが元気になって、以前から楽しみにしていた川遊びとBBQに出掛けることができた。

この一連の子供たちの病は、何らかのウイルス感染症で、次々と感染したのだと思う。最初は背最上部から邪熱が発散する病態で葛根湯を使った。葛根湯は呼吸器疾患のカゼに使うだけのものではない。急性状態であるから、1日3回などというノンビリした使い方ではなく、2時間に1回のペースで使うのが本来の使い方である。それから侵攻され、リンパ関連の腫れが出、また、邪熱が発散する場所が背上部から肩甲骨下部付近になって来る。そうなると、小柴胡湯が必要となる。腫れに対しては桔梗が必要。その熱感が強ければ、更に石膏を加える。

この様に次々と感染したのは3年前の水疱瘡以来。たいへんだが、抑え込むのではなく、外へ追い出す治療をすることで、子供は、より元気なからだになる。幸いな1週間だったということになる。(2012年9月白露)